

「人により、神に聞き従う」 使徒言行録4章13～24節

細井 茂徳

私たち教会が属しています日本基督教団では、8月の第一主日を「平和聖日」と定めております。多くの教会でこの日、戦争という悲惨な出来事を思い返し、それと共に自らが犯した過ちを悔い改めつつ、礼拝を守っています。そのことを覚えつつ今朝与えられました聖書箇所は、使徒言行録4章からです。

ペンテコステの出来事からまだそれほど時が経っていない頃に、主の弟子たちによる伝道に脅威を抱いたユダヤ人指導者たちが、ペトロとヨハネの二人を捕えて尋問をしたことが4章に記されています。使徒言行録に出てくる最初の「迫害」、いやまだ妨害程度のことだったかもしれません。それでもこの後の本格的な迫害や弾圧を予兆させる使徒たちにとって戦々恐々とした状況が示されています。まるで日本の戦時下のキリスト教会を思い起こさせる迫害や弾圧を思い起こさせます。そんな圧力の中で使徒たちは次の言葉を語りました。「しかし、ペトロとヨハネは答えた。『神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、ご判断ください』」(19節)。この言葉はその後の伝道に励んでいく教会の標語になったとさえ言われます。

このとき様々な妨害や脅しを受けても、それでも使徒たちが大胆に福音を宣べ伝えることを止めなかったもの。彼らを突き動かしていたものとは何だったのでしょうか。ペトロとヨハネの「**二人は、釈放されると仲間のところへ行き**」、状況を「**残らず報告**」しました(23節)。「**これを聞いた人たちは心を一つにし**」祈りました。そして神に向かって声を上げて言った「**主よ、あなたは天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方です**」(24節)と。使徒たちの行動の背後にあったもの、それは信仰者たちを支え強くしている「神」がいかなるお方であるのかを、皆で心を一つにして、声を上げて、告白する。これこそがたとえ迫害の只中にあっても正しい判断を見失うことなく、使徒たちを強くなさしめたものであったのです。